

日語「～ニ／トナル」構文之被動、自發、可能、尊敬用法 的探討

蘇文郎

国立政治大學日本語文學系教授

摘要

本論文主要在探討日語「名詞ニ／トナル」句之被動、自發、可能、尊敬用法，在蘇(2005)的研究裡發現，「名詞ニ／トナル」句除具有表變化的典型用法外，它並具有表非變化的多種用法。本論文針對「名詞ニ／トナル」表非變化的被動、自發、可能、尊敬用法、依下列順序剖析其結構特徵及語義形成之原理。

- i) ナル與文法態・「(ラ)レル」間之關連性
- ii) 被動用法
- iii) 自發用法
- iv) 可能用法
- v) 尊敬用法

關鍵詞：變化、被動、自發、可能、尊敬、與「(ラ)レル」之關連性

受理日期：2015.03.13

通過日期：2015.10.30

**A study of polysemic structure of “(noun)ni/to *naru*”
expressions : Focusing on passive , spontaneous ,potential
and
respectful meaning**

Soo,Wen-Lang

Professor,Department of Japanese,National Chengchi University

Abstract

The purpose of this paper is to analyze the marginal uses of the “(noun)ni/to *naru*” expressions in Japanese. In my analysis(2005) , I have found that the “(noun)ni/to *naru*” expression has prototypical meaning of change-of-state , besides it has several kinds of non-prototypical meaning . The main discussion of this paper includes passive use ,spontaneous use , potential use , and respectful use related to the change-of-state sentences either in construction or in meaning .

Keywords: change-of-state expression , passive use , spontaneous use,
potential use , respectful use,connection with “(*ra*)*reru*”

日本語「～ニ／トナル」構文の受身・自発・可能・尊敬 用法についての一考察

蘇文郎

国立政治大学日本語文学科教授

要旨

蘇（2005）の考察で分かったことであるが、「～ニ／トナル」におけるニ／ト格の名詞と動詞「ナル」の結びつきという共通の形式構造の中に様々な意味構造を読みとることができる。そして典型的ともいふべき変化を表す用法とそれとなんらかの係りをもった派生的な用法すなわち**受身・自発・可能・尊敬などの用法**もある。

本稿は次のような手順にそれぞれの用法の構文的特徴と意味形成の原理を探求する。

- i) ナルと文法的ヴォイス・「(ラ) レル」との関連性
- ii) 受身用法
- iii) 自発用法
- iv) 可能用法
- v) 尊敬用法

キーワード：変化、受身、自発、可能、尊敬、「(ラ) レル」との関連性

日本語「～ニ／トナル」構文の受身・自発・可能・尊敬 用法についての一考察

蘇文郎

国立政治大学日本語文学科教授

1. はじめに

1.1. 本研究の背景

筆者はこれまで、日本語のナル表現を形態、統語、意味の3つの側面から詳しい考察を行い、かなり具体的な成果を上げることができた。その中でナル表現のヴォイス (Voice) 性の解明の重要性にも気付いて関連する限りで触れてきた。しかし、そこでは「ナル表現」における受動、可能、自発、尊敬との関連性及びその意味転化の原理などについては、体系的な考察にいたらず、またナルが動詞接辞「(ラ)レル」と深い関わりを持つことなど、新たに加えるべきことも発見された故、ここに改めて取り上げる。

1.2. ナル表現とヴォイスとの関連性

1.2.1. ヴォイスとは

ヴォイスとは何か、日本文法事典(2014)では、次のように定義している。

文を構成する動詞の語形と名詞の格関係が交替する現象。文のかなめとなる述語の役目をになう動詞の形態論的なカテゴリーと文の主語との対応関係をいう。¹

日本語文法研究における「ヴォイス」という用語は、国語学においては伝統的に「相」という訳が当てられているが、最近ではほとんど「態」と訳される。

ヴォイス (voice) はもともと西洋文法からきた概念である。ヨーロッパ文法では伝統的にヴォイスを能動(active)vs. 受動(passive)

¹ 動詞の形態変化にともなう名詞項の格交替現象という捉え方もある。

/中相 (middle) の対立と見ているようである。²

ヴォイスを前掲した定義のように「動詞の形態変化にともなう名詞項の格交替現象」と捉えるなら、日本語では(ラ)レル形(受動、自発、可能、(尊敬)³)に加えて、(サ)セル形(使役)もヴォイスの枠内で捉えられる。また、日本語では自動詞と他動詞に形態的な対立があるので、動詞の自他(他動性)もヴォイスと連続的に捉えられる。

ちなみに寺村(1982)では、ヴォイスという概念を日本語の文法体系の記述に組み込むために、形態・統語・意味の3つの面からの明確な特徴づけが必要と主張し、ヴォイスというのは「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と規定している。そして、格の移動と対応する動詞の形の中に、出現予測ができる形態素を抽出できるもの、すなわち、受動態・使役態・可能態・自発態を「文法的な態」と、そして、予測が不可能な、つまり辞書に個別に記述すべき形態的対応関係にあるもの、例えば、同一の語根からわかれた自動詞・他動詞の対立を「語彙的な態」とした。

文法的「態」－

{	受動態
	使役態
	可能態
	自発態

語彙的「態」－ (同一の語根からわかれた) 自動詞・他動詞の対立

これまでのヴォイス研究は、主に寺村の言う「文法的な態」について論じられてきたが、語彙的「態」の問題についてはヴォイス体系に組み込まれず、個別的に記述されるのが現状である。

1.2.2. ナルが持つヴォイスの意味

衆知の通り、現代日本語では「(ラ)レル」は、下例1~4に示さ

² 益岡(2013:P204)を参照

³ 「オ(動作名詞)ニナル」形式の尊敬表現は「ヴォイスとは文を構成する動詞の語形と名詞の格関係が交替する現象」という定義にそぐわないため、ヴォイス(態)としない捉え方もある。寺村(1982)がそれである。

れるように、同じ文法的な形で「自発」「受動」「可能」そして、「尊敬」の意味を表すという意味では、この文法的な形式の持つ文法的な意味は多義的である。

1. それを口に出すのはためられる。(自発用法)
2. 妹が弟にたたかれる。(受身用法)
3. 彼があす来るとは考えられない。(可能用法)
4. 先生は6時のバスで帰られました。(尊敬用法)

一方、下例5～8の「～ニ/トナル」構文にも受身、自発、可能、尊敬の意味が見受けられる。

5. フランスでは、この薬剤は販売中止になった。(受身)
6. 僕はときどきひどく不安な気持ちになってしまう。(自発)
7. 健一はそれほど頼りになる奴ではない。(可能)
8. 村田さんはもうお帰りになりました。(尊敬)

従来の研究において、ナル表現は変化を表す形式の一つとして扱われることが多かったが、ナルは〈変化〉以外に〈受身〉〈自発〉〈可能〉〈尊敬〉の意味を表すこともあるため、「ナル表現」は受身・自発・可能・尊敬と相補的・連続的に関係を持ちつつ体系をなしていると考えられる。

1.3. 本稿の立場と目的

ナル表現は文法的ヴォイスを表す「(ラ)レル」とともにヴォイス体系の一環をなしていると思えるべきだというのが本研究の立場である。

本稿では、「ナル」が表す〈受身〉〈自発〉〈可能〉〈尊敬〉の意味に焦点を当て、その機能的特性と意味形成の原理について考察を試みる⁴。

⁴ 「オ〈動作名詞〉ニナル」の尊敬表現は、形態的には文法的ヴォイスからずれているが、意味的には「自発」と連続性を持っていると思われるため、本研究では考察対象とする。

2. 「(ラ) レル」と「ナル」の関連性

2.1. 古語の「ル」「ラル」が「ナル」に源を発している説

現代日本語の動詞接辞「(ラ) レル」には「自発」「可能」「受身」「尊敬」の意味を表しうることはもう証明済みで自明のことであるが、この動詞接辞の起源についてはまだ不明な点もある。「(ラ) レル」の基本的な意味的機能は「ナル」から派生してきたものという次の考え方がある⁵。

〔自発〕：ナル（為る）という動詞は「現象や事物が自然に変化する」というのが本義である。…下二段の他動詞にナルを補助動詞としてつけて、「あげなる」「あてなる」といった。早口に発音するとき、ゲナ [g(en)a]、テナ [t(en)a] の部分がそれぞれ縮約されて「上がる」「当たる」に変化し、ラ行四段の自動詞が成立した。…

〔受身〕：…漢文の受身表現は「人の言ふ所となる」である。これを国文調に言い換えた「人に言ひなる」は、これを早口に発音する時、ヒナ [h(in)a] の部分が縮約されて「人に言はる」になった。…

〔可能〕：ナル（成る）という動詞はある行為の結果として完了・完成・成功するというのが本義である。ナル（成る）には「することができる。なし得る」という可能の用法がある。…四段動詞に可能の意味をそえようとするとき、このナル（成る）を補助動詞としてそえて「飲みなる」「言ひなる」といった。ミナ [m(in)a]、ヒナ [h(in)a] の部分が縮約されて「飲まる」「言はる」になり、可能の助動詞「る」が成立した。

〔尊敬〕：〔尊敬〕ナル（成る）は「成功」の意から「念願が成就して立身出生する」ことを言うようになり、「成り昇る」「成り上がる」「成り立つ」という言葉ができた。＜直人の上達部などまで成りのぼりたる＞（源・行幸）。さらに、貴人がおでましになることを「成る」といった。＜御所になりぬとてあれば皆起きて参る＞＜皇后宮の御方へなる＞など。＜行幸なる＞＜崩御なる＞など、「成る」は貴人の行為・動作を

⁵ 田井（1978）頁 77～81 参照

尊敬して言う用語になった。

こうした背景があって、尊敬動詞にさらに敬意を増強しようとするときナル（成る）を補助動詞としてつけた。たとえば、「おぼしめなる」はシナ [s (in) a] が縮約されて「おぼしめさる」になった。語尾を切り離したのが尊敬の助動詞「る」である。こうして、「おぼさる」「聞こしめさる」「知ろしめさる」などが平安時代に現れた。四段以外の動詞につけた場合、例えば、「仰せなる」はセナ [s (en) a] の縮約が不可能であった。しかしこのままでは接続が円滑でないので、「な」が子交 [nr] をとげて「仰せらる」になり、尊敬の「らる」が成立した。

2.2. 語形的に同一歩調の転化をとげている両者

上掲した捉え方では、「自発」「可能」「受身」「尊敬」の意味を表す古語の「ル」「ラル」にはまだ「ナル」の痕跡が残っている、つまり自発・受身の助動詞「る」「らる」の語源は補助動詞のナル（為る）で、可能、尊敬の助動詞「る」「らる」の語源は補助動詞の「成る」であるという起源説はまだ信が置きがたく、日本語文法学界の全面的な支持を得られていないかもしれない。両者は語源も意味・用法も違っているが、語形的には同一歩調の転化をとげて現代語に及んでいる。

こうして、現代語の「(ラ)レル」を「文語的な形」に戻し、この表現の形態、語構成、意味などについて考察を加えることにより、有意義な事象を見出すことも可能となる。これを対象に考察すれば、現代日本語と古典語の関係のみならず、現代日本語が古典語から受けた変容の実態もいく分かは垣間見ることが期待できる。

3. ナル表現が持つヴォイス的意味特性の分析

3.1. 「ナル」が持つ「受身」的意味特性

9. 春希が撮影場を首になった。(春よ)

10. 趙治勲九段のお宅に上がり込んで、お酒や鮎などを御馳走になったりしたのだ。(筑波山)

11. 黒い門扉は鉄製で頑丈そうだったが、これは開けっ放しにな
っていて、門衛小屋には門衛の姿は見えなかった。(ノルウェイ
の森)

9～11の例文を眺めてみると「～になる」という表現の奥に受身((9)は「首にされる」、(10)は「招待された」、(11)は「開けっ放しに
されていて」)の意味が隠れていることがわかる。

ところが、受身はヴォイスの一つとして位置づけられ、伝統的な日本語文法の捉え方では受動「(ラ)レル」という文法的な形のなかに、「受身」という文法的な意味をもとめる。だが、それはヴォイスのカテゴリーのなかにすえたいうえで、能動「スル」という文法的なかたちとの対立のなかでとらえる必要があるとし、このなかで、「(ラ)レル」が「他者からの動作の受け取り(受動)であるとすれば、「スル」は「他者への動作の働きかけ(能動)を表し、互いに他の存在を前提としたうえでヴォイスのカテゴリーをつくる。というように、他者への働きかけを表さない自動詞の「ナル」は、その語用的な意味の性格から言って、ヴォイスのカテゴリーのなかには入りこまないことになる。つまり、このカテゴリーを形成し、能動と受動という文法的な意味の対立をなすことができるのは、「他動性」というカテゴリカルな意味をもった動詞にかぎられるということになる。すなわち、ある文法的な形をとることができるかどうか、ある文法的なカテゴリーのなかに入りこむことができるかによって、動詞の持つ自動性・他動性を特定することができるとされるため、ナルはヴォイス体系から排除されている。

9～11に示しているように、「(春希は)首になる、(私は)ご馳走になる、(黒い門扉は)開けっ放しになる」は、それぞれ「首にする」、「御馳走をする」「開けっ放しにする」との対比において、仕手と受け手の交替による降格現象が認められ、「～ニナル」と「～ヲスル」は対になり、自他の対立と同時に受動・能動の意味の対立をも示していることがわかる。

9～11の諸例文の観察を通じて、これらの連語における「ナル」は、

自他対立と受動・能動との二重の語彙的ヴォイスを特徴付ける機能動詞として振る舞っていることがわかる。つまり、このタイプの連語における「ナル」は、文法的受動態を押えて語彙的受動態を確立させる、いわば語彙統語論レベルで“ナル形の受動文”を形成する役割を担っている機能動詞と認定できる。⁶

なお、「ナル」が他動詞系の動作名詞⁷と結びつくと全体で他動詞の受動系相当の「サレル」という意味に変質する現象がよく観察できる。以下の例がそれである。

11. 「・・・なにしろ外食してるところをみつかっただけで停学になる学校なんだから」(ノルウェイの森)
12. 常勝軍団の一員になったからこそ、実現した美技だった。昨オフ、中日を戦力外となり、巨人に加入。5月20日に初昇格し、ナインの切り替えの早さにごく然とした。
(2015.06.05. Yahoo)
13. 公務員などほかの公職の場合、有罪となった人は懲戒免職になるなどして仕事を追われるのに、彼らが立候補することは庶民感情としては受け入れられない。(例文13～16は蘇(2005)から再録)
14. 教育課程の修了者は1次試験が免除となる。(同上)
15. 夜の会食も各省庁に置かれる倫理監督(事務次官)の許可を得た場合などを除いて禁止となる。(同上)
16. 薬剤の別途負担は1977年9月から医療費抑制のため導入されたところが日本医師会は「診療費抑制となる」と強く反対、政府はそれを受け入れ…(同上)

11～16の例では受動文として表現することも可能である。(11)「退学になる←→退学される」、(12)「戦力外となる←→戦力外にされる」、(13)「免職になる←→免職される」、(14)「免除となる←→

⁶ 沢田(1992) 参照

⁷ ここで言う「動作名詞」における「動作」は、動的な事態(出来事)全般を表す広義のものを指す。

免除される」、(15)「禁止となる←→禁止される」、(16)「診療費抑制となる←→診療費(が)抑制される」の交替が成立し、いずれの文も受動文相当である。その表すところは殆ど変わらない。類似の表現に「免停(免許書停止処分)、停職、罷免、減給、起訴、戒告、処分、採用、除籍、除名、送還、追放、全廃、中止…」などがある。人や物に対する制度的な措置、処分を表す意味的特徴を持つ他動詞系の動作名詞はだいたいこの構文形式の交替が成立する。⁸

17. 有権者が不適格と思う最高裁判官に「×」印を付け、有効投票の過半数に達すればその裁判官は罷免となる。(毎日 2000)
---その意味で司法の場合にも国民主権は貫かれている。ただし制度的にはそうであっても国民審査で罷免された裁判官は過去にいない。(同上)

18. 2001年4月から財政投融改革が動き出す。財投機関の多くを占める特殊法人が原則全廃されれば、財投そのものが抜本的な見直を迫られることになる。---第三に特殊法人全廃となれば、官僚の天下り先が大幅に減り、公務員改革を促進することにもなる。(同上)

19. 事件となった2件は後者である。一方は殺人罪で起訴され、もう一方は不起訴となった。(同上)

こういった特徴は(17)の例のように前文で「罷免となる」、後続する文では「罷免される」が用いられている。そして(18)(19)の例ではそれぞれ前文で「全廃される」、「起訴される」、後続文では「全廃となる」、「不起訴となる」が用いられているということでも裏付けられよう。

また、他動詞系の動作名詞(動詞の名詞形)が「ナル」と結びつき、他動性が失われ、受動的な意味になる表現もよく見られる。以下がその例である。

20. また首相だけでなく、閣僚も質問の趣旨からはずれた答弁をし、

⁸ 蘇(2005)参照

再度同じ質問の繰り返しになることが多い。

(繰り返される)

21. ---利潤追求の研究が重視され、社会科学、人文科学、基礎学問、天文学、災害、環境などの分野や、心の豊かさによって不可欠な文化の切り捨てになることは明らかである。

(切り捨てられる)

22. 最終的には、住民の同意項目が基準から消え、これに伴って可動堰も正規の見直し対象から外され、別枠扱いとなった。

(別枠扱いされる)

3.2. 自発的意味を表す「ナル」の機能的特性

3.2.1. 従来 of 扱い方

日本語の文法における自発とは、動詞の表現形式で、行為・動作を人が積極的意志を持って行うのではなく、自然にあるいはひとりでの実現する現象・作用のように言う表現である。自発は、一つの文法カテゴリーとして確立しているが、量的にも少なく、その認定は研究者の間でも、微妙に異なる。例えば、自発の定義に関して、「思われる、惜しまれるなど感情動詞に限られる」(村木1991)、「しのぶ、悔やむ、判断する、思いやる、悩む、推定するなど心的作用を表す叙情の自発を中心に、受身や可能、無意思性の自動詞と隣接関係を持つ」(杉本1988)などがある。一方、寺村(1982)は「動作・作用の主体が意識されず、X(ガ格)がひとりでのそうなるということを表す」としている。また、受動表現との違いを「述語の表す事態を引き起こしたものの存在が意識されているのといないのとの違い」とし、「焼ける、割れる、抜ける、売れる、きれる…」なども自発表現として扱っている。

また、川崎(1970)のように〈自発〉の特徴とされる「自然にそうなる」ということをさらに広く捉え、次のような形式を〈自発〉としているのが注目に値する。

i) 動詞自体に自発的意味の認められる場合

- ii) 副詞が自発的意味を表す場合
- iii) 「なる」が自発的意味を添える場合
- iv) 〈主語＋動詞〉に自発的意味の認められる場合
- v) 〈主語＋副詞＋動詞〉(即ちiv)が更に自発的意味を表わす副詞を伴う場合
- vi) 〈主語＋形容詞＋なる〉
- vii) 〈眼に留まる〉 〈心に浮ぶ〉に類する言い方

金谷(2000)は「日本語では「ある状況における制御不可能性」こそ受身・可能・尊敬・自発の共通の意味」とし、古代日本語ナルをめぐる考究においても、日本語文法の「受身・尊敬・自発・可能」は検討すべき重要な課題であると指摘している。

金谷が指摘したように、「ナル」は「(ラ)レル」と同様、一つの形式で〈自発〉〈可能〉〈受身〉〈尊敬〉をも表し得るのである。意味的だけでなく、語源的にも、「(ラ)レル」と深い関係を持っていることは否めない。

3.2.2. 自発的意味を表すナル構文の機能的特性

「自発」を「そうしようと思っていないのに、自然とそのような状態になる」という無意図的実現の意味として捉えるならば、次の23～25の例に示された無意図的実現の意味を表すナル構文が自発表現の一つとして入れられる。

23. 空は高く、じっと見ていると目が痛くなるほどだった。(ノルウエイの森)

24. 僕はときどきひどく不安な気持ちになってしまう。(同上)

25. この曲聴くと私時々すごく哀しくなることがあるの。(同上)

ここでいう〈自発〉とは、『自発的に行動しなさい』の〈自発〉ではなく、『おのずからそうなる』という意味の〈自発〉である。

では、ナル文がどういう場合に自発表現になり得るか、またその形式が持つ自発表現の働きはどのようなものであるか、典型的な自発表現とどのような違いがあるのか、さらになぜ自発表現になり得

るかなど、ナル文が自発表現として成立する条件やその性格について考えてみることにする。

26. 震災1年前の高校1年の春のことを思い返すようになりまし
た。(2015.03.Yahoo)

27. なにしる二日たてばケロッとしちゃうわけでしょ、だからまあ
放っておけばそのうちになんとかなるだろうって思うように
なったのね。(ノルウェイの森)

28. そういふのを見ているうちに、僕は少しずつ直子に対して好感
を抱くようになってきた。(同上)

29. 夏休みが終って新しい学期が始まると直子はごく自然にまる
で当然のこのように僕のとなりを歩くようになった。(同上)

30. 「ここは静かだからみんな自然に静かな声で話すようになるの
よ」直子は魚の骨を皿の隅にきれいに選りわけてあつめ、ハン
カチで口もとを拭いた。(同上)

31. 病院に入って少ししてから小指は動くようになったから、音大
に復学してなんとか卒業することはできたわよ。(同上)

上掲した26～31の「～ようになる」文は、自発表現といってよい
ような例である。いずれの例も、事態が主体の意志とは関係なく、
自然に、おのずから、ひとりでの発生することを表しており、意味
的な自発表現であると考えられる。

上の考察結果をまとめてみると、二つのことが言える。まず、一
つ目は、ナル文が、自発表現になる場合は「なる」の前接語が、感
情、感覚、知覚、思考、判断、自動作用を表す形容詞や動詞、ある
いは主体の身体的変化によるなりゆきを表す動詞、または、主体に
おこる自然現象を表す動詞である場合、習慣・反復を表す連用修飾
語、非意志性・自然性を表す連用修飾語と共起するといった場合、
「ナル」がおかれた文脈から「自発」と捉えることができるという
ことである。そして、二つ目は、ナル文は典型的な自発表現「(ラ)
レル」文より広い範囲で用いられることである。

3.3. 可能的意味を表すナルの機能的特性

3.3.1 「可能」の意味をめぐる先行研究の捉え方

これまで「可能」の意味そのものに言及した先行研究が数えきれないほどたくさんある。それらは自ずから「可能」の意味の多様性に言及し、列挙的に述べる場合が多い。例えば青木(1980)では、可能表現の用法を四つ挙げている。そして、4つ目の意味用法の説明に

(iv) 動作主体の意志や能力とは無関係な動作の実現。例「昔のことが偲ばれる」

を挙げている。青木(1980)の挙げている(iv)は非意志的動作の実現であり、通常は「自発」に区分され、可能とは一線を画すものとされている。非意志的という点でこれと共通しているが、人の動作以外の事象の実現にまで「可能」の用語を当てているという点で更に徹底しているのが金子(1980)である。

金子(1980)は、「同じような事件が今後も起こり得る」のような文を、見込みの存在を問題にする可能として、「認識の可能」と呼んでいる。これらは可能の意味をより広く取ろうとする志向性の線上に把握された意味であるという点で共通している。⁹その一方で、表現の方を広く取ろうとする志向性の張(1998)の論考もある。

張(1998)は、「ブレーキをかけても車が止まらない」「洗濯したら汚れが落ちる」のような表現は可能動詞を用いないものの、「動作主の意図した状態変化を表現している」として、可能表現の一種と位置づけ、「結果可能表現」と呼んでいる。このような表現を可能表現の一種として範疇化するための根拠として、「可能」の意味の中で「動作主の意図」を意味上の必須要素と規定していることは、構文的にも意味的にも動作主の存在しない非意志的事象の実現可能性の表現を金子(1980)の言う「認識の可能」という可能表現の一種として認めることとは異なるタイプの拡大と言える。

⁹金子(1980)参照

3.3.2. 「自発」と「可能」の違い

いわゆる「可能」は、「やっとピアノが弾けるようになった。」の「弾ける」のように、「そうしよう、そうしたいと思っていたことの実現」を表し、実現に向けての意思・希望があらかじめ存在する点で、それがない「自発」とは区別される。

これまでの先行研究を見ていると、日本語の可能表現は、その歴史変遷の中で、その意味内容を「自発」概念から「受身」「可能」へと範囲を拡大し、さらに外部条件によって可能・不可能が決まるという「外的条件」中心から、動作を行う「有生物(動作主)の主体性」重視への、二方向の関わりによってさまざまな内容が提示されるようになった。また形態的にも意味内容の拡大・発展とともに様々な可能形が存在するようになってきていることが見て取れる。この結果として共時的に、現在の可能表現には様々な意味と形態が共存、入り組んで存在しているととらえてもよからう。

3.3.3. 「ナル」の可能的意味形成の原理

Jacobsen (1989)は自発表現でも特に否定の自発表現に可能の意味が生じやすいと述べ、その根拠として、32. a が 32. b のように置き換え可能であることを挙げている。

32. a. いくら押しても窓が開かない。

b. いくら押しても窓を開けることができない。

Jacobsen はナルに関して「可能の意味が生じるのは否定の場合に限られているようである」とし、33の例を挙げて説明している。

33. 長年辛抱していた夫の行為がとうとう我慢ならなくなった。

なお、Jacobsen は、自動詞文の表現と自発表現をほぼ同じ意味で用いているようである¹⁰。

一方、蘇 (2005)でも、ナル表現の中に可能の意味にとらえられるものがあると指摘している。そして、ナルに可能の意味があるとす

¹⁰Jacobsen (1989) 参照、例文も引用

る根拠として34. a、34. b文のような、ナルがデキルという形態と置き換え可能であることを挙げている。

- 34. a. 最終報告書は現場教師には大いに参考になるのではないか。
- b. 最終報告書は現場教師には大いに参考にできるのではないか。

3.3.4. 可能の意味解釈が成立する条件

蘇（2005）の、ナルという形態がデキルという形態に置き換えることができることからナルには可能の意味機能があるという主張に同調して、ナルとデキルを置き換えることができる条件、すなわち、ナル構文が可能の意味を帯びているとの解釈が成立する条件について関（2010）はさらに考察を深め、次の二点を挙げている。

- 35. (i) 有情物動作主の存在（明示、非明示を問わず）があること
- (ii) 文脈からその有情物動作主または話し手における達成感、喜び、利益を読み取れること¹¹

可能の意味を「そうしよう、そうしたいと思っていたことの実現」と捉えるなら、結果可能の論理はすなわち「“～したい” → “～することができる”」を反映しているように、動作主の意図（希望）がかなえられて、あるいは努力が実って動作が実現することである。そのことは、次の36～38の文が、

36. 犯罪少年を強制的に排除するなどの方法だけでは再発防止になるとは思えない。（蘇（2005）から再録）

37. たとえ1次エネルギーに占める比率が1%にも満たさない世界としても消費者の意識改革にもなる今回の試みを評価した。（同上）

38. 共演者が1人ずつ、涙ながらにあいさつしていく。最後にマイクを持った土屋も「しゃべれないよ、もう。本当に言葉にならない…」とあふれる涙が止まらなかった。（Yahoo ニュ

¹¹ 関（2010）からの引用

ース 2015.08.20)

39. 健一はそれほど頼りになる奴ではない。(関(2010)からの借用)

36～39では、話し手(非明示)と有情物動作主が別に存在している。そして有情物動作主 にとっての「再発防止」「意識改革」「言葉を話す」「頼る」などといった事柄は喜びや利益の性質を有していると情報の受け手である読み手が解釈した場合はナル構文が可能の意味を帯び、その結果としてナルをデキルと置き換えることができるのである。いずれも「動作性名詞ニ/トナル」の述語句を「～することができる」という有標識の可能表現形式に置き換えても表現の趣旨と知的意味が変わらないということから検証され、上掲した35の二つの条件(i)(ii)を共に満たすことにより、こういったナル表現が可能の意味を帯びているとの解釈が成り立ったわけである。

3.4. 尊敬用法の形態的特徴と機能的特性

3.4.1. 尊敬表現における〈動作名詞〉の形態的特徴

40. このさし絵は山本さんご自身がお描きになったそうです。(日本語文型辞典)

41. 今度大阪においでになる時に、ぜひうちにお泊りになってください。(同上)

42. 先生は何時にお帰りになりますか

43. 野村先生は1972年に京都大学をご卒業になりました。(同上)

44. ご家族の方は半額の会費ですべてのスポーツ施設をご利用になれます。(同上)¹²

動詞の尊敬形を代表するのは40の「お描きになる」と41の「おいでになる」「お泊りになる」のような「オ+中立形+ニ+ナル」¹³という形式である。この形式における中立形の前後に「オ」と「ニ

¹² 尊敬表現として使う場合、動詞の連用形や行為を表す漢語名詞を用いる。43、44のように漢語名詞とともに使用する場合は「ごNになる」の形が多い。

¹³ 「中立形」は益岡(2013)の用語である。

「ナル」という形態が現れる。「オ」と「ニナル」は「お土産」「雨になる」という表現に見られるように、名詞の前後に出現する形態であるという点では、「お描きになる」などのような尊敬形に出現する中立形が名詞的な性格を持っていることが窺える。

3.4. 2. 尊敬用法の機能的特性

なお、尊敬用法の由来について、2.1で触れたように自発用法からの拡張であるとする説もある。すなわち、尊敬の対象となる人物の行為をあたかも自然に起きたかのように表現することが尊敬表現につながるのだというものである。

「先生は何時にお帰りになりますか」に見られるように、もともと「自発」を意味する「なる」によって尊敬をあらわす。本来、「自発」「自然展開」をよしとする日本人の価値意識は「自発」を本意とする言葉に「価値」の意味を付与することになる。つまり「自発」「自然展開」的になされる行為に価値を与え、価値を付与された語によって「尊敬」をあらわすという言語史的展開が見られるわけである。

14

3.5. 「ナル」の語用論的特徴

「～ニ/トナル」構文は主に自発的な変化の意味が認められるが、「ナル」の基本的な意味に戻して考えると、自発的な変化だけでなく、「ラレル」と同じように「可能」「受身」「尊敬」といった意味や要素も現代語に取り入れられていることが明らかになった。

以上の考察で、古代語の「ル・ラル」のもとになった「ナル」には、受身を表す用法のほかに自発・可能・尊敬を表す用法があることが検証できた。そしてナル構文による受身・自発・可能・尊敬のいずれの用法においても人為性を背景化することが見て取れる。すなわち、受身・自発は行為者が事態の主役とならず、可能・尊敬は

¹⁴ 荒木博之（1983）参照

行為そのものが潜在化し、表現されているという語用論的特徴が見受けられたわけである。

4. 終わりに

以上の考察でわかったことは、現代日本語では受身、自発、可能、尊敬といったヴォイス的意味を表現する仕組みは、単に動詞に接辞「(ラ)レル」をつけて表すという仕組みだけでなく、「ナル」表現という句レベルの統語的な方式で表されることもあるということである。すなわち、文法的ヴォイスの「(ラ)レル」と語彙的ヴォイスの「ナル」は形式の違いにもかかわらず、ヴォイス的意味の表示方法に関わる共通の性質が認められるのである。「ナル」は「～(ラ)レル」のように一つの形式で〈自発〉〈可能〉〈受身〉〈尊敬〉をも表し得るのである。以上の点から考えると、日本語の「～(ラ)レル」において、同じ根、つまり「ナル」から発していると考えられるため、〈自発〉〈可能〉〈受身〉〈尊敬〉がお互いに連続性を持っていることが明らかになった。したがってこのナルが表す意味や機能が文法的ヴォイスとどのように相関し、関わり合っているかを見出していくことは日本語のヴォイス体系の本質を正しく捉えるために大切なことであろう。

参考文献

- 青木伶子(1980)『国語学大事典』, 国語学会編, 東京堂出版
- 安達太郎(1997)「「なる」による変化構文の意味と用法」『広島女子
大学国際文化部紀要』第4号
- 荒木博之(1983)『敬語日本人論』PHP
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 尹順徳(2004)「自発表現としての「よくなる」文」『言語科学論集
第8号』
- 川崎潔(1970)「国語の自発的表現」『獨協大学教養諸学研究』4
- 川村大(2004)「受身、自発、可能、尊敬—動詞ラレル形の世界—」
『朝倉日本語講座6文法Ⅱ』朝倉書店
- 金谷武洋(2002)『日本語には主語はいらない』講談社
- 金子尚一(1980)「可能表現の形式と意味(I)—“力の可能”と“認
識の可能”について」『共立女子短期大学紀要(文科)』第23号
- 佐藤琢三(1997)「ナルの表現と丁寧さ」『文教大学国文』26
- 沢田奈保子(1992)「機能動詞「ナル」の發揮する受動表現的特性に
ついて」『世界の日本語教育』2
- 杉本和之(1988)「現代語における自発の位相」『日本語教育66号』
- 砂川有里子他編(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 関秀一(2010)「なるの意味解釈—可能の意味に着目して—」『言語
処理学会 第16回年次大会 発表論文集』
- 蘇文郎(2001)「変化表現についての一考察」東呉日語教育学報24期
- 蘇文郎(2005)「Nニ/トナルの非変化的用法及び他の表現との連続性」
『政大日本研究』第二号
- 田井信之(1978)『日本語の語源』角川書店
- 張威(1998)『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立
場から—』くろしお出版
- 寺村秀夫(1976)「ナル表現とスル表現」2「態(ボイス)の表現形
式のいろいろ」『日本語と日本語教育』国立国語研究所
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版

- 日本文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 益岡隆志（2013）『日本語構文意味論』くろしお出版
- 村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』萬友社
- 村木新次郎（1991）「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 山岡政紀（2003）「可能動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』第13号 創価大学日本語日本文学会
- 森田良行（1994）『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 吉川千鶴子（1994）『動詞の文法』くろしお出版
- 鷲尾龍一（2010）「ヴォイスの意味」『ひつじ意味論講座 語・文と文法カテゴリーの意味』沢田治美編 ひつじ書房
- Wesley M. Jacobsen（1989）「他動詞とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』くろしお出版